



Title	ファッション伊太利の人口政策
Author(s)	上原, 轍三郎
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 2, 283-300
Issue Date	1934-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10613
Type	departmental bulletin paper
File Information	2_p283-300.pdf



フアシヨ伊太利の人口政策

上 原 轍 三 郎

伊太利は由來出移民の多い國として有名であつた。即ち十五世紀の始めに於て既に相當多くの出移民があつたが、其信賴すべき統計を得たる一八七六年に於ては永住的移住者即ち海外移住者一九、八四八人、季節的移住者即ち主として歐洲諸國への移住者八八、九三三人、計一〇八、七七一人に達して居つた。其後漸次増大して一八七六年より一八八六年迄の年平均は一三四、七七四人であつたものが一八八七年より一九〇〇年迄の年平均に於ては二六九、七四二人、一九〇一年より一九一三年迄の年平均に於ては六二六、五〇六人となり、一九一三年には最高レコード八七二、五九八人となつて居るのである。此の内、海外移住者の數は既に一八八七年に於て歐洲移住者の數を凌駕し、爾來大體其の趨勢を保つて來て居るのである。今之の數を現住の人口數に比較するに次表に示す如く人口千人に就き移住者數は夫々の年に於て三・九五、四・七四、八・七一、一八・五七、二四・六一人となつて居るのである。

1) 附録第一表参照。

年次	現住人口	出移民數	現住人口一、〇〇〇人に就き出移民數
一八七六年	二七、五四七 <small>千人</small>	一〇八、七七一	三、九五 <small>人</small>
自一八七六年平均	二八、四三七	一二四、七七四	四、七四
自一八八〇年平均	三〇、九八一	二六九、七四二	八、七一
自一九〇〇年平均	三三、七三三	六六六、五〇六	八、七五
至一九一三年平均	三五、四一八	八七三、五九八	二四、六一

之の割合は實に驚くべき數であつて世界に於て如斯多數の割合を於て移住者を出した國は多くない。今參考の爲め一九一一年に於ける歐洲主要國の出移民數及其の住民千人に對する割合を表示すれば次の如し。²⁾

國名	年	出移民數	住民千人に對する割合	國名	年	出移民數	住民千人に對する割合
獨逸	一九二三年	一八、五四五	〇・二八	シユヰイツ	一九二一年	五、五二二	一・四六
オーストリア	一九二二年	九〇、一三四	三・二四	ベルギー	一九二〇年	二、三九三	二・九〇
ウシカールン	一九二二年	七三、六五四	三・五	和蘭	一九二二年	二、六三八	〇・四四
フインランド	一九二二年	九、三七三	二・九	丁抹	一九二二年	八、三〇三	三・〇〇
伊太利	一九二三年	七二、四四六	二・〇元	スエーデン	一九二一年	一九、九九七	三・六一
スベイン	一九二二年	一七五、五七	八・九五	ノールウエーゲン	一九二一年	一三、四七七	五・二六
ホルチユガル	一九二二年	五九、六二	二・〇五	大英及 アイラランド	一九二三年	四六七、七二	一〇・二五

2) Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich (1913) Anhang. s. 7.

即ち伊太利以外で比較的多數の割合を以て移民を出して居る國は大英國及アイルランド、ボルチユガル、スペイン等であるけれども何れも千人中一〇人内外のものである。

伊太利が斯く多數の出移住者を出したことは畢竟其の國土の狭小なると、自然富源の貧弱なると、國民數が多なるとに原因するものであつて、國民は逼迫せる國內にあつて齟齬するよりも國外に出て、より有利なる經濟的環境の内に自個發展の運命を開拓せんと欲する念願によりたるものである。而して伊太利國は如斯多數の國民を國外に出してこそよく其國民經濟が圓滿に運行されたものである。

今之れを人口調節の上に見るに、由來伊太利は國民の數國土の割合に多くして而も其蕃殖力は旺盛なるものがあつて一九〇八年より一九一三年迄の平均に於て人口千人に就き十二人の自然増加率を示し、年々三、四十万人の人口を増加しつゝありたるものが更に又海外より歸國する國民の數年々二、三十万人に及び結局年々五、六十万人の人口増加を見るべき國である。故に若し此れ等多數の國民が其のまゝ國內に停滯したならば忽ちにして人口過剩の現象を發生して人口食糧問題の紛糾を見るべき運命を有するものである。然るに幸に前述の如く多數の國民が年々國外に移住する所ありたるを以て人口増加の激勢を緩和することが出來たと云ふべきである。今之の邊の消息を明かにする爲めに一九〇一年より一九一三年迄、十三ヶ年間の人口の自然増加、海外よりの歸國者、海外への移住者等に就き一表として示せば次の様になる。

年次	自然増加	海外よりの歸國者數	計	海外への移住者	差引増加人口
一九〇一年	三四三、三七人	七七、五七人	四二〇、八〇人	二七九、六七人	一四〇、一三人

一九〇二年	三六八,九三	九,七〇七	四八,八〇〇	二四,六四四	一七三,九四六
一九〇三年	三〇五,七九六	一三〇,六四五	四六,四四四	二六,四四三	一四三,九六
一九〇四年	三六六,八七五	一六八,七九六	五五,一〇六	二五,一六六	一〇二,八四一
一九〇五年	三五四,一七六	一一九,八五六	四四,〇三六	四四,七〇三	一六,九五三
一九〇六年	三五四,二〇三	一五九,九七	五三,〇三〇	五二,九四五	二〇,一五三
一九〇七年	三三三,〇〇〇	一四八,四二八	六〇,四二八	四一,五九一	一四,五三三
一九〇八年	三六八,七五九	一〇〇,八三四	六八,九五三	二二,八五三	四三,一〇一〇
一九〇九年	三七七,三三	一四三,二一〇	五二,一六一	三九,六二二	一一,二二六
一九一〇年	四六一,九五	一六一,四二八	五三,〇九六	四〇,一七九	二一〇,三三〇
一九一一年	三三〇,七四	二八,九九六	五八,七三三	二六,一七九	一〇六,九五
一九一二年	四八八,一九	一三,九九〇	六七,一七	四〇,三〇六	二二,六二
一九一三年	四八八,五二九	一八,九七六	六四,四七	五五,五六	二七,九三

備考

自然増加数は Proceedings of the world populations Conference. Held at the Sale Centrale, Geneva, August 29th to september 3rd. 1927. Edited by Mrs. Margaret Sanger (London 1927) p. 67-68 により歸國者數及出移住者數は Publication of the National Bureau of Economic research, in corporated. No. 14. International Migrations Vol. I. p. 820 及 p. 839 による。

即ち一九〇一年より一九一三年に至る十三ケ年間に於て自然増加數と、歸國數と合して年平均を求むれば其の數は五四八、一三四人となるが若し海外への移住者なかりせば伊太利は年々之れだけの人口増加を來すべかりし

ものが海外への移住者年平均三六四、六四一人ありたるが爲め、結局年平均の増加人口は一八三、四九五人に過ぎざるの理となり、人口増加の趨勢は外國移民によつて著るしく緩和されたることを明かにするものである、勿論此の外歐洲移住者の出入に就ても之れも考慮に入るべき筈なるが此處に其統計を得ず、而も彼れ等は主として季節的移住者であつて人口の増減には比較的影響少きを以て此處に之れを省略することとした。

次に移住者は國內に於ける勞働力を殺滅し生産を低下すると云ふ弊害の方面と、過剰なる勞働力を移出して國內の勞働條件を良好にすると云ふ利益の方面と弊利二様に考へられるものであるが、伊太利國の如き國情に於ては後者即ち利益ありと云ふ考へ方が當つて居る様である、即ち出移住者のある爲め國內の勞働市場を適切にし、勞働賃銀を高騰し、勞働者の境遇を良好にするものと考へられるのである。之れはサルトリウス・ホン・ワルタースハウゼンの説く所である。³⁾次に又移民によつて祖國に送り來る所謂移民の送金なるものであるが、元來伊太利の出移民には前述の如く海外に移住するものと、歐洲諸國に移住するものと二種類があつて前者は海外特に北米、南米に於て農業、土工夫、小商業其他種々な仕事に従事しやゝ永住的に移住するものであり、後者は夏季繁忙な時に於て農業、土工夫、左官、煉瓦、漆喰等の事業に傭はれて勞くもので主として一時的の移住者である、従て兩者の性質は著るしく異なるものではあるが何れも其勞力を國外で使用し、其の得たる勞働賃銀を母國に送り又は持ち歸へるものが少くないのである、即ち一九〇四年から一九〇七年の頃に於てシシリア丈だけでも年々六千万リラ（約二千三百万圓）以上の送金があつたと云はれ、⁴⁾又戰前に於ては伊太利全國で年額三億乃至四億五千万リラ（一億一千乃至一億七千万圓）に達したと稱せられて居る。⁵⁾而して此の莫大な金は或は住宅の新築、土地

- 3) Handwörterbuch d. Staatswissenschaften 4. Auf. Bd. II. s. 102
- 4) Handwörterbuch d. Staatswissenschaften 4. Auf. Bd. II. s. 102
- 5) 東京政治經濟研究所：世界政治經濟年鑑、七三七頁

の購買、小事業の經營等消費的に或は生産的に種々な方面に使用せられることは勿論であるが、之れによつて伊太利國の國民經濟を利することは少くない、特に大地主の土地を分割購買して小自作農が出来ると云ふが如きことは伊太利國の社會經濟の上に最も良結果を持ち來すものと云はなくてはならない。又之れによつて伊太利國の國際的貸借のバランスが保たれて行くと云ふことも忘れてはならない。元來伊太利國は貿易上に於ては常習的に輸入超過の國であつて國際的貸借のバランスは移民の送金と、遊覽者の落す金とによりて保もたれつゝあるものである、今之れを數示すれば次表の如きものがある。

年次	國際的支出勘定			國際的収入分			純收支
	輸 入	利 子	合 計	移 民 の 送 金	遊 覽 者 の 入 金	海 上 運 賃	
一九〇一—五年	400	110	510	300	350	125	(+) 330
一九〇五—一〇年	1,100	160	1,260	450	400	150	(-) 135
一九一〇—一四年	1,200	175	1,375	450	425	200	(-) 185

即ち移民の送金は國際收入の上に於て極めて重要な位置を占めて居ることを知るのである。

如斯にして伊太利の出移民は伊太利國の人口問題、勞働問題、國民の經濟問題等諸種の方面から見て極めて重要な意義を與へて居つたものである、此處に於て伊太利に於ける多くの經濟學者は一九〇〇年から一九一三年迄の出移民は全國的に極めて有利であつて伊太利の國民經濟は之れによつて少なからず潤はされたものであると云ふて居る。

6) 東京政治經濟研究所：世界政治經濟年鑑 p. 73.

7) Handwörterbuch d. Staatswissenschaften 4. Aufl. Bd II. s. 102.

然るに其後に於ける出移民の情勢を見るに、一九一四年を堺として著るしく亂調子を示し、年によりて高低常なき有様を呈して居る。けれども之れを一般的に云へば著るしく減少して昔日の半分又は十分の一に低下するに至つた。即ち一九一三年には八十七萬人の多きに達して居つたが一九一四年には四十七萬人、一九一五年には十四萬人、それより漸次減少して一九一八年には二萬八千人となり、更に一九一九年よりやゝ増加して一九二〇年には六十一萬人となり、一九二一年より再び減少の傾向を示して其後一進一退を示して一昨一九三二年に於ては八萬三千人となつて一九一三年の十分の一に満たずといふ有様である¹⁾。

此の情勢を示すに至つたことは戦時中は非常の秋として誠に止むを得ないことであるが其後に於て、特にファシスト政府の成立後に於て漸次移民の減少するに至りたることは大に注目を要する所である。其理由は勿論種々複雑なるものがある之れを對外的のものと、對内的のものとに分つことが出来よう、而して對外的のものとしては北米合衆國の入移民の制限と、諸外國に於ける經濟的不況の結果等が考へられるが、私は此處に此の問題を暫らく措いて、對内的の理由に就て少しく考察して見度いと思ふ。戦後伊太利に於ける人口増加の趨勢は他の歐洲諸國に於けると同様に自然の増加率は一般的に減少したけれども之れを諸他國のそれに比すれば僅かな減少であつて伊太利は依然として歐洲諸國中和蘭と共に高率なる自然増加率を持續して居つて年々四、五十萬人の自然増加を示して居るのである、従て上述の出移民の減少した理由は自然増加の形勢が一變した爲めにあるとは云はれ

1) 附録第一表参照

2) 附録第二表参照

ない。然らば何んであるか、フアシストの人口政策之れである。即ち元來フアシストは國家主義を標榜するもので國民は國家の基礎である、力であるといふ信念を持つてゐる、從て國民を國外に出すことは國家の損失である。國民は成るべく之れを國內に保留して國力の強大を計らなくてはならないと云ふ考を有するものである。

此のことはムツソリニーが一九二七年五月二十六日のキリスト昇天祭に際し、下院に於て行つたと云ふ演説の内に

「國家百年の計を憂ふる聰明なる識者は堂々として斷言するであらう。祖國の事業や重且つ大。吾人は人口の餘りに少きことを痛感すると。予は茲に斷言して宣言する。諸國民の政治的勢力、經濟的、また精神的勢力の、よしや根本的要素ではなくとも先決的の要素は實にその人口の勢力であるのだ。吾人は率直に明確に議論をしやう。九千萬の獨逸人、二億萬人のスラブ人に對して、四千萬の伊太利人が何である？ 更に目を西方に轉じやう。四千萬の佛蘭西人と、其の植民地の住民九千萬人に對して、また四千六百萬の英國人と、その植民地の住民四億五千萬に對立して四千萬の伊太利人が何である？ 諸君、イタリヤが多少の重きを成して列強の間に伍するためには住民六千萬を下らざる人口を有して、現世紀の敷居を跨がなくてはならない。と言つたら諸君或は之れを難じて、『この山の多い、平野の少ない狭い國に、そんなに多數の人口で、吾人はどうして生活して行けやう。えらい人口過剰だ。生活難はどうする？』と言ふであらう。……既に一八一五年伊太利の地に僅か一千六百萬の人口しかなかつた時に於て、時の學者どもが人口過剰を叫び、……躍起となつて騒ぎ立てた事實を諸君は一人としてよもや忘れはしまい。その時代に於て彼等學者先生どもは、同一の地域内に於いて、その

當時よりも遙かに優越せる生活の程度を以て、今日四千萬のイタリヤ國民が優に住宅と營養とを見出し得ることは夢にも想像し得なかつたであらう。……イタリヤは決して人口過剰ではない、最早溢れ出すやうな心配はない。河修工事は充分に出來てゐる、滔々として水勢を増さうとも眞直に堤防の間を流れて行く途はついでる……」³⁾

と述べて居ることによつても明かに首肯せられる所であるが、更に又ローマ、ベルギア大學教授ロバート・ミツヘル氏が一九三〇年七月の世界經濟論叢に於て

「今や伊太利の人口政策は根本的に變化して來た、北米合衆國の移民制限、其の他によりて伊太利人の外國移住は困難になつて來たけれども、更にムツソリニーは國民を他外國に移住せしむることは他國民に文化的肥料を供給するが如きものである。故に伊太利國民の國外移住は之れを困難にし、國民の子孫は成るべく母國に留め置き、又直接國民の増殖を計る政策を立つべきであると云ふて居る。これが爲めに此の政策を採用したる前と後とは移住民の上に大なる相異を來して居る、即ち一九二〇年には四十一萬人であつたが一九二七年には二十三萬八千人に減少し、更に十九萬一千人の歸國者を見るに至つた。伊太利人の永年慣れ來つた外國移住は今や消滅せんとして居る」⁴⁾

と云ふて居る、以てファシストの人口政策の主要を窺ふに足ると思ふ。而してムツソリニーは伊太利の人口増殖の方策として獨身者に課税の法を立てたり、國立母子保護協會と云ふが如きものを設立して居るのである。之れは畢竟ファシストが國民の人口は國家繁榮の決定的要素であるから之れを海外に移住せしむることは愚の至りで

3) 下位春吉：ムツソリニの獅子吼。p. 255-257.

4) Weltwirtschaftliches Archiv Juli 1930. s. 235-236.

ある、宜しく之れを國內に留め置くべきである。而して人口は多きに過ぐると云ふことはないから人口増加の方法も亦之れを講ずべきであるとして國民の海外移住を國內滯留に轉向せしめんとするものであつて、其の結果上述の如き移民の趨勢を現はしたものと見るべきである。

三

然らば其方策如何、之れに關しては一方に於て出移住の許可を容易に與へざる様に規定を設け、他方に於て農業生産の集約化と土地改良並に内國植民事業が企てられた。而してムツソリニーは此の政策を實行することによつて國民の食糧供給の根原を確立し、工業不振によつて生ずる失業者を救済し、又道德的にも衛生的にも最も患ふべき都市への人口集中の弊害をも除去することが出来る、加之農業の繁榮を計ることは國民の大部分を占めて居る農業者の幸福を計ることであつて、やがて又國家全體の幸福を増すものと信じたのである。而して其の具體的表現としては一九二五年の秋、穀物の動員令を發布して全國の農業者に訴へて農業者は常に小麥の栽培面積を増加することに努力するのみならず、出来るだけ穀物栽培の合理化と集約化とを計ることを以て其義務とすべしとなし。又一九二八年七月廿六日の閣議に於て決定したる全國的な土地開墾法を發布して、從來惡水停滯、マリア病地として、又收穫不良の土地として全く顧みられなかつた土地凡そ百五十万陌の改良を行ひ、之れに小農家を移植せんと企てた。而して此の植民事業は少くとも十四ヶ年間に完成せんとするものであつて、其の費用としては七十五億ワリラ(二十九億二千五百万圓)が豫定せられ、其の内約半分、即ち三十八億ワリラは國家が賠償す

1) 之れに就ては外務省通商局：伊太利移民(昭和八年三月)頁三四—四五参照。

ることゝなつて居る。此の額は伊太利國の財政に取つては相當大きな額であるが、之れによつて一方國土の生産を増し他方事業施行の爲めに多數の労働者を救ひ、又完成の暁は多數の農民を其處に安定せしむるものであつて從來他外國によつて生活して居つた多數の國民が伊太利國によつて生活することが出来る様になると考へた。

而して伊太利國政府は此の計畫を立つると共に農林省の内に土地開墾局を新設し、同時に又内國植民事業委員會を組織して人口過剩の地方から人口稀薄にして土地の開墾、改良に多くの人力を要する地方へ國民の移住法等に就て協議せしむることゝしたのである。

如斯にして伊太利に於ては外國移民を内國移民に轉向せしめんが爲めに土地の開墾又は改良事業を大に計畫したものであるが其の施さるべき土地面積は兩者を合して三百八十八万七千七百六十九陌であると云はれて居る。其の内改良さるべき土地が二、五〇四、七五〇陌、開墾さるべき土地が一、三八二、〇一八陌で此れ等の事業を行ふ爲めに公私に於て毎日最低二八、一一七人（一九二二—二三）から最高五二、一六四人（一九三一—三二）の労働者を使用して居るものであつて、ファシストの過去十ヶ年間に於て二七八、二七一人を使用して居る、今一人の年平均労働日数を二百五十日とすれば實に六九、五六七、七五〇の労働日数を此の事業によつて確保せられたと云ふて居る。

今又事業進捗の具體的表示としてアルベルト・ギスランツォニ博士が示す所を見るにファシストの過去十ヶ年間に於てアグロ、ロマノに於ては次の如き成績を擧げて居る。

種	類	一九二二年	一九三二年	種	類	一九二二年	一九三二年
人口	定着戸數	一、八六六	四、七三〇	建築物	建築群	三六〇	一、七六四
	同上家族數	九、三六〇	二二、五九		住宅	一、九〇	四、八六六
家畜	牛	一〇、六四四	三三、八三三	水	勞働者寄宿所	三〇〇	九五七
	馬	二、〇六二	三、七五		澆水面積(陌)	八〇〇	一九、五七
	羊	一一、〇〇〇	九〇、七五〇		澆水量(1噸秒)	二四〇	一六、〇三
				澆水設備	四	五三五	

如斯にして今やトリヤ、サバウヂヤ、ボンチニヤ等の地方に於て多くの村落が開設せられつゝあるといふことである。而して之れ等の村落に於ては學校、教會、フアシヨ家、工作場、義勇兵舎、共同娛樂場、活動寫眞館等の設備を有し、更に市街地よりやゝ遠き村落に於ては小貨物用トラックが毎週一回宛通つて食糧品其他必要なる物資の輸送をなして居るといふことである、又之れ等の各村落は完全なる交通道路を以て連結せられ、更に電燈動力等の連絡も出來て居るといふことである、以て村落構成上の大要を窺ふことが出来る。而して同氏はリトリヤ、サバウヂヤ、ボンチニヤ等は實に新世代に對する模範たるべきものであつて自然の征服戰は單に勇氣のみを以ては足りない整然と秩序的に、持久的に努力して始めて成功するものたることを示すであらう。フアシストの文化意識は千年も前のローマ征服の精神を再現したものであつて、勇氣・理性・忍耐・秩序・規律に根源するものであるといふて居る、以て此の事業に對する精神的態度が窺はれるのである。

2) Dr. Alberto Ghislanzoni; Faschistische Innenkolonisation (Wirtschaftsdienst Hamburg, d. 20 Oktober 1933).

四

以上によりて伊太利に於ける人口政策は一時出移民に傾注せられて居つたが今やファシストの時代に於ては出来るだけ國民の國外移住を少なくし國民は國內に定着せしめんことを欲し、之れが爲めに土地改良、土地開墾、内國植民事業の計畫をなし旺んに其の實行をなすつゝあることを知りたるものであるが、之れはファシストの國家主義を表現したる一大事實であつて今日の如く凡ゆる方面に於て國際關係が悪化した時代に於ては或は必然の現象と見るべきであらう、唯如斯方策が伊太利の如き國情に於て果してよく成功するや否やは將來の問題として大に注目を要する所である。即ち伊太利の國土と其の抱有する自然富源とを以て將來増加するであらう所の多數の國民をよく養ひ、その幸福をよく増進することが出来るや否や、別言すれば伊太利は其の國民を他外國に移住せしむることなくして國內に於てよく其の人口問題を解決し得るや否や、又從來移民によりて得來りたる外國よりの送金なくして其國民經濟を維持し得るや否や、又國際貸借のバランスを保ち得るや否や疑問とすべき點が多々あるのである。吾人は寧ろ近き將來に於て此の政策の行きつまりを來すべきにはあらざるやを思ふものである。現に伊太利政府は此の外鐵道、水電、其他種々の事業に多額の國費を支出して労働者の救済につとめつゝありと雖も失業者の數は次表の如く年を追ふて増加の形勢を示して居る、之れには種々の事情ありと雖も伊太利の人口問題が困難に向ひつゝあることを實證するものといふべきである。¹⁾

1) The World Almanac and Book of Facts 1933. p. 668.

年 月 日	失業者數	年 月 日	失業者數	年 月 日	失業者數
一九四、八、三	二八、〇〇〇	一九七、六、三〇	二四、六〇〇	一九〇、六、三〇	三三、三〇〇
一九三、八、三	七四、五七	一九八、六、三〇	二七、〇〇〇	一九三、六、三〇	五七、五七
一九三、八、三	七八、三〇〇	一九九、六、三〇	一七、〇〇〇	一九三、六、三〇	九〇、〇九七

若し此の方策にして行きつまりを生ずる場合は伊太利は其の人口問題を如何に解決するや、再び國民の外國移住に其の解決策を求むべきではあるまいか、而も北米合衆國を始め多くの國は從來の如く移民を歓迎せざるのみならず却つて之れを制限若しくは拒否するものと想像せられるのである。この事は國際交通の發達を阻害し、或は經濟の理法を無視するものであつて甚だ不可とする所であるが、今日の國際情勢に於ては止むを得ざる所である。又フアシストの理論よりしても國民の海外移住は之れを欲せざる所である。此處に於て伊太利は其の移民の放出口を其の植民地に求めざるべからざるは當然の歸結である。蓋し植民地は母國の統治權の及ぶ所であつて其の移民方策の如きは其の欲するがまゝに之れを行ふことが出來、又其處への移住は何等國家的領域を脱するものでないから國家主義の上から見ても憂ふべき點がないからである。然し伊太利の有する植民地は亦其自然富源が貧弱にして而も國民の移住に適する所が甚だ少ない、そこで伊太利は更により有利なる植民地の獲得を要望するや勿論である。従てフアシスト伊太利の人口問題は外國移民問題より内國移民問題となり將來は再轉して植民問題に轉向すべき運命を有するものと考へられのである。

一九二六	一九二五	一九二四	一九二三	一九二二	一九二一	一九二〇
一、九〇、〇〇〇	一、八〇、〇〇〇	一、七〇、〇〇〇	一、六〇、〇〇〇	一、五〇、〇〇〇	一、四〇、〇〇〇	一、三〇、〇〇〇
一、九〇、〇〇〇	一、八〇、〇〇〇	一、七〇、〇〇〇	一、六〇、〇〇〇	一、五〇、〇〇〇	一、四〇、〇〇〇	一、三〇、〇〇〇
一、九〇、〇〇〇	一、八〇、〇〇〇	一、七〇、〇〇〇	一、六〇、〇〇〇	一、五〇、〇〇〇	一、四〇、〇〇〇	一、三〇、〇〇〇
一、九〇、〇〇〇	一、八〇、〇〇〇	一、七〇、〇〇〇	一、六〇、〇〇〇	一、五〇、〇〇〇	一、四〇、〇〇〇	一、三〇、〇〇〇
一、九〇、〇〇〇	一、八〇、〇〇〇	一、七〇、〇〇〇	一、六〇、〇〇〇	一、五〇、〇〇〇	一、四〇、〇〇〇	一、三〇、〇〇〇
一、九〇、〇〇〇	一、八〇、〇〇〇	一、七〇、〇〇〇	一、六〇、〇〇〇	一、五〇、〇〇〇	一、四〇、〇〇〇	一、三〇、〇〇〇

備考 本表は「一八七六一一九二〇」の Publications of the National Bureau of Economic Research, Incorporated No. 14. International Migrations Vol. I. statistics. (New York 1929) p. 820 により、「一九二一—一九三二」は M. Epstein: The statesman's Year-Books により作製す。

附録表一 歐洲主要國の人口自然増加率 (現住者千人に就き)

年次	獨逸	佛蘭西	英國	伊太利	和蘭	スイス	トリアリス	ハンガリ	ベルギー
一九二二	八、五	一、八	七、八	一、五	四、八	六、七	五、五	八、六	六、三
一九二一	一、三	一、〇	一、〇	一、二	一、三	一、一	一、二	一、〇	一、〇
一九二〇	一、八	一、四	一、三	一、三	一、三	一、五	一、四	一、〇	一、三
一九一九	四、五	(-) 六、七	一、五	二、二	一、八	四、四	(-) 二、四	一、七	二、〇
一九一八	(-) 〇、四	(-) 二、八	一、五	(-) 四、九	一、七	〇、七	(-) 二、四	一、五	九、七
一九一七	(-) 〇、六	(-) 七、二	一、〇	〇、三	二、九	四、九	(-) 九、一	四、七	五、一
一九一六	(-) 〇、四	(-) 七、六	一、七	四、四	三、六	六、〇	(-) 六、三	一、五	〇、三
一九一五	(-) 一、〇	(-) 六、四	一、七	〇、〇	三、七	六、三	(-) 六、二	一、三	三、一
一九一四	一、七	(-) 〇、九	九、八	一、三	三、九	八、八	五、三	一、二	六、三
一九一三	一、三	〇、九	一、〇	一、〇	三、三	九、五	一、〇	一、四	七、七

一八八七	元、六、四	一八九六	三、五、六	一九〇五	五、三、九	一九一四	五、八、九	一九二三	五、六、六
一八八八	元、八、三	一八九七	三、七、六	一九〇六	五、三、三	一九一五	六、五、五	一九二四	六、六、九
一八八九	三〇、〇、三	一八九八	三、九、六	一九〇七	五、三、五	一九一六	六、七、四	一九二五	六、八、二
一八九〇	三〇、三、五	一八九九	三、一、六	一九〇八	三、八、七	一九一七	六、六、一	一九二六	六、四、九
一八九一	三〇、四、五	一九〇〇	三、三、五	一九〇九	四、〇、八	一九一八	六、三、〇	一九二七	四、〇、四
一八九二	三〇、六、六	一九〇一	三、三、三	一九一〇	四、三、七	一九一九	六、〇、九	一九二八	四、四、五
一八九三	三〇、八、六	一九〇二	三、七、〇	一九一一	四、六、九	一九二〇	六、三、六	一九二九	四、七、九
一八九四	三二、〇、六	一九〇三	三、八、〇	一九一二	五、〇、三	一九二一	六、六、六	一九三〇	四、一、六
一八九五	三二、三、六	一九〇四	三、〇、六	一九一三	五、四、八	一九二二	七、〇、〇	一九三一	四、八、六

- 備考 一八七二—一九二三年は前掲 World Population Conference p. 67-68.
 一九二四—二五年は Statesman's year-Book (1926) p. 995.
 一九二六—一九三二年は Statesman's year-Book (1933) p. 1026. による。